

心と心がつなぐ未来

台風18号災害から見いだした『光』

■問い合わせ 市民協働課 ☎内線372

現在
いまを見つめて

平成23年3月に発生した東日本大震災をはじめ、日本各地で自然災害が多発する現代。小浜でも、昨年9月、台風18号が猛威を振るい、住宅地の冠水など市内各地に甚大な被害をもたらしました。そのような中、災害発生直後から780人がボランティアに駆けつけ、初期復旧に大きな役割を果たしました。このように、今や災害からの復旧に、ボランティアの存在はなくてはならないものになっており、その受け入れ体制の整備は、地域の重要課題の一つとなっています。小浜では、官民協働の災害ボランティアセンターが、受け皿として、その役割を担っています。昨年の災害を振り返り、ボランティアの必要性や、受け入れる地域の課題について検証しました。

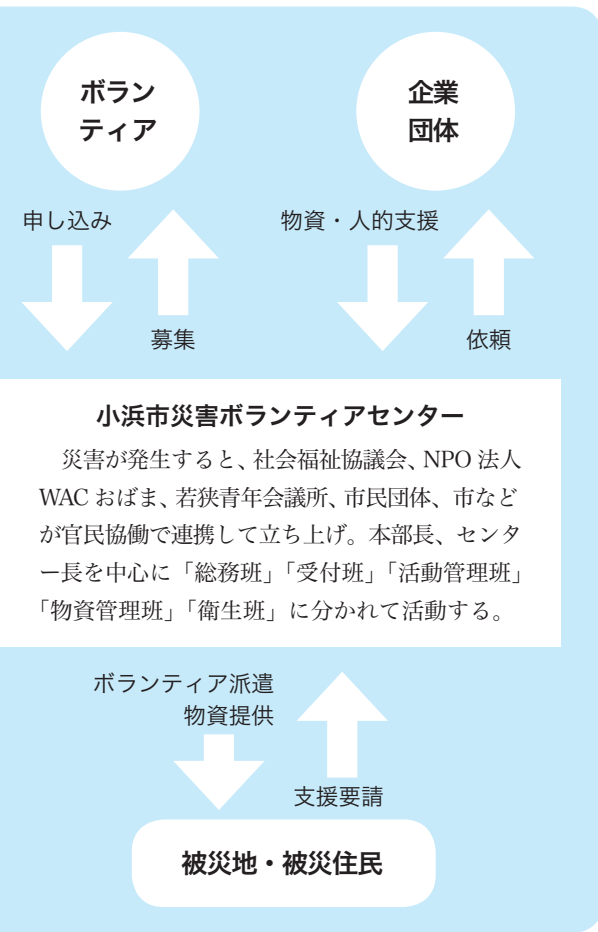
小浜市の災害ボランティアセンターとは

「災害ボランティアセンター」という組織をご存じでしょうか。災害が発生したときに、ボランティアの受け入れや被災地への派遣がスムーズに進むよう調整する組織のことです。

小浜では、社会福祉協議会と市民団体、市などが協働で運営。災害が発生すると、センターを立ち上げて、①ボランティアの募集・受け入れ ②被災地のニーズ把握 ③資機材の把握 ④物資管理 ⑤総務などの業務を担い、集まったボランティアが被災地でスムーズに活動できるように、地域や支援企業とも連携しながら調整を行います。平時は連絡会として、年2回の訓練や研修会を実施しています。



写真上／平成25年9月の台風18号に伴う豪雨被害には、市内外から多くのボランティアが駆けつけた。写真は、池河内区での復旧作業の様子
右下／市ボランティアセンターに携わる市民の皆さん。同年6月の研修会で撮影
左下／同年8月の総合防災訓練に参加。この2週間後に災害が…



●台風18号の被害

平成25年9月15日夕方から16日にかけて、嶺南地域を中心に襲った台風18号に伴う豪雨は、本市においても24時間雨量384ミリと、観測史上最大を記録。気象庁が全国でも初となる特別警報を発表しました（16日5時5分）。各地で冠水や土砂崩れが発生し、住宅の全壊や浸水など多くの被害をもたらしました。



太良庄区は一時孤立(県防災航空隊提供)

●小浜市災害ボランティアセンターの歩み

平成24年10月に、市と社会福祉協議会、WACおばま、青年会議所、各市民団体を中心に連絡会を立ち上げ、外部専門家を招いて定期的に訓練・研修を実施。平成25年9月の台風18号災害のときに、初めて実施。780人(37団体170個人)のボランティアを受け入れて、被災地に派遣しました。参加したボランティアの一人は、「作業後に、その家のお父さんが涙を浮かべながら、ひとりひとりにお礼を言っていて、うれしかった」と、感動した様子で話してくれました。



センターの運営に参加
木村 武史 さん
(33歳・上加斗)

一市民としてセンターの運営に参加して、加茂区などの復旧作業の現地責任者を務めました。地元の人々が参加することで、被災地域の人にも安心してもらえて、スムーズに作業ができました。より多くの市民の皆さんに参加してほしいですね

「力になれたことが、うれしかった」参加ボランティアは、感動を言葉にした

心と心がつなぐ未来

座談会「あの災害を振り返って」

過去 教訓を生かして

わたしたちは災害にどう向き合うべきか。昨年9月の災害時に、ボランティアセンターを運営した社会福祉協議会と市の担当者に、ボランティア参加者、被災地域の住民を交えて座談会を開催しました。

芝 台風18号を経験するまで、災害ボランティアセンターの存在は知っていませんでした。竹中 正直知りませんでした。山本 わたしも知りませんでした。田中 山本さんには開設時からずっと参加いただきました。山本 わたしは、加茂と江古

川で復旧作業をしました。田中 作業をしていて気づいたことはありませんか。山本 最初は、庭の土砂撤去をしました。作業をする人が多くて、中には手持ちぶさたになる人もいました。

芝 初日は、加茂と江古川以外の区からは、電話で尋ねても、ニーズが上がってこずに、結果として2カ所にボランティアが集中しました。

センターでボランティア受付

市外からも多くの人が参加

田中 逆にボランティアは、初日から想定を超える大勢の人が集まりました。

芝 実は、災害発生直後に、センターをどのタイミングで立ち上げるか迷いがありました。立ち上げても、ボランティアが集まらないのではという不安でいっぱいでした。

田中 結果、早い時期の立ち上げが功を奏して、多くのメディアにも取り上げられて、市内外から延べ800人近くの皆さんが駆けつけてくれました。山本 名古屋から来たという人もいましたね。

竹中 外からこれだけの人が助けに来てくれたことに感激しました。どこかで災害が起きたときは、わたしたちも行かなければと、みんな言っていました。

田中 逆に市内からの参加は全体の3割。企業や団体を引いて個人に限ると1割でした。



加茂区での災害復旧作業

芝 5月に、街頭アンケート調査を実施しました（上のグラフを参照）。ボランティアに参加したいという意識は皆さんあるようです。

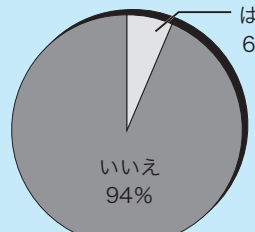
田中 山本さんは、どのようなきっかけでボランティアに参加したのですか。山本 暇だったからです（笑）仕事を辞めて体が空いたから

が、非常に重要視されています。身近な市民ボランティアが増えると、わたしたちも心強いです。思いと思いの交流
芝 加茂区の皆さんは、感謝の気持ちを横断幕にしていますね。山本 作業から帰るときに見ました。隣にいたボランティアの女の子は「ジーンときた」と言って泣いていました。

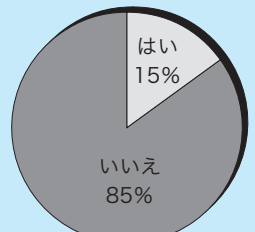


加茂区住民がボランティアに感謝の横断幕

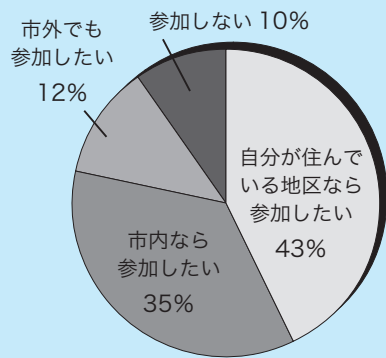
■災害復旧支援のボランティアに参加したことがありますか？



■その拠点となる災害ボランティアセンターを知っていますか？



■災害が起きたら復旧支援のボランティア活動に参加しますか？



市民 100 人に聞きました！

10代～70代までの男女100人を対象に「災害ボランティア」について街頭アンケートを実施しました。

「家のまわりだけでなく、心もきれいになりました」
被災地域の住民は、感謝の気持ちを伝えた

心と心がつなぐ未来

座談会「あの災害を振り返って」

竹中 住民の中には、家の中に土砂が入っていても、知らない人が来て作業することを拒否する人もいました。わたしや区長などが間に入ることです承してもらいましたが。山本 抵抗はあるでしょうね。家の中に入るわけですから。田中 センターが派遣するボランティアの現地責任者と、竹中さんのような地域のリー



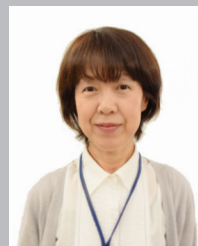
6月3日サン・サンホーム小浜(遠敷)で座談会

ダーがうまく調整してもらえると、センターから被災状況やニーズに応じた人や資材を届けることができます。芝 市では、地区公民館を地域づくりの拠点にしたいと検討を進めています。災害時にも情報が集まる場所になれば。竹中 住民も、どこにどんな人が住んでいるかなど、普段から地域のことを把握しておかなければいけませんね。

広がる人のつながり

田中 物資や食事の提供など、ボランティアを側面から支援したいという人も多かったです。人の輪がどんどん広がっていくのを感じました。芝 わたしも現場で、全然知らない人同士が復旧作業を通して知り合いになるのを目の

人の輪づくりが災害に強いまちを作る
災害ボランティアは、市民の皆さんの積極的な参加と意欲的な取り組みに支えられています。

市民協働課
まつい なおみ 課長
松井 直美

その根底にあるのは、人を思いやるという気持ちです。台風18号災害では、支援者も、受援者も、お互いを思いやり、心を通わせることで、結果として復旧が進みました。人の輪づくりは協働を進めることで、災害に強いまちを目指しましょう。

当たりにしました。人間というのはこうやってつながっていくのだと感じました。

田中 ボランティアに参加した人からは、山本さんというイイ人と知り合えたので、これからボランティア活動に誘いたいという声も。山本 (笑)。また体が空いて

いれば参加したいと思います。

田中 まだボランティア経験がない人も、まずは地域の行事など身近な活動に参加する一歩を踏み出してほしいです。そこから人はつながれるので。芝 すべての人と人とのつながりから始まります。これが、まさに協働なんですね。

未来

そしてその先へ

「おれ、大学に行ったら、ボランティアサークルに入る」
支援を受けた高校生は、決意した

支える力

助け合いの心が温かな未来へ

台風18号時には、被災した世帯の高校生から、「大学に行ったらボランティアサークルに入る。ボランティアかつこええわ」という声をもらい、支援の活動は人の心を耕すことを実感しました。建設業をはじめ、企業や団体の皆さんからの利害関係を越えた支援も助け合いのネットワークとなりました。困っている人の情報を提供することからでも災害支援はできます。日ごろの社会活動の中で「つながり力」を高め、助け合い支え合えるまちをみんなで作りましょう。

支援力を高める第一歩

- ① 助け合いの精神を持ち、有事にはマンパワーを発揮できる人づくり
 - ② 普段から強いつながりを持つ地域づくり
 - ③ 利害関係を越えた企業や団体との絆づくり
- ※連絡会では、災害ボランティア登録を受け付けています。詳しくは市民協働課まで



小浜市社会福祉協議会

とよなが しんせい
事務局長 豊永 真誠 さん (59歳・高塚)

台風18号災害時にはボランティアセンターの本部長として復旧活動にあたった。小浜市災害ボランティアセンター連絡会座長

災害ボランティアの存在は認知されるようになってきましたが、受け入れる側にその準備ができていないことが多いです。ただ、被災したらボランティアに頼るだけでなく、隣近所で助け合うことも大事です。

普段の地域活動の中に防災と言う視点を入れて、地域の中で助け合わなければいけないという思いを持つことが受援力となります。みんなで自分の命の守り方を考えて、隣近所で助け合うという、支え支えられる意識を高めることで、地域は強くなります。

受援力を高める第一歩

- ① 災害時に、弱い箇所や困る人の存在など地域の状況を把握しましょう
- ② 自主防災組織やリーダーを作り、支援の受け入れ窓口を設けましょう
- ③ 困ったときはお互いさま。被災して支援が必要ときは遠慮なくボランティアに頼りましょう

受け取る力

受援力をつけて地域を強く元気に



まちの防災研究会

まつもり かずと
代表 松森 和人 さん (53歳・敦賀市)

県内各地で自主防災を支援。年100回近く講演会を行っている。小浜市災害ボランティアセンター連絡会アドバイザー。内閣府防災ボランティア検討会委員